

### 第三章 紫の君の物語 冬の雪の夜の孤影

[第一段 紫の君、嫉妬す]

大臣は(おとどは)、あながちに思いらるるにしもあらねど(やみくもにご執心というわけではないが)、つれなき御けしきのうれたきに(前齋院のつれない御心向きが不本意で)、負けてやみなむも口惜しく(引き下がって終わるのも口惜しかったが)、\*げにはた(しかした)、人の御ありさま(前齋院の御人格や)、世のおぼえことに(評判も格別で)、あらまほしく(申し分ないので)、ものを深く思し知り(分別をわきまえて)、世の人の、とあるかかるけぢめも(世の人々がそれぞれに実際に生活する違いも)聞き集めたまひて(広くお知りなつて)、昔よりもあまた経まさりて思さるれば(昔よりもはるかに多くの経験を積んで来られているので)、今さらの御\*あだけも(今さらの浮世事も、自重すべきかとは思ふものの)、かつは世の\*もどきをも思しながら(また一方では、既に世間に知られたこの言い寄りを実らすことが出来なければ情けなく揶揄されるともお考へになつて)、\*注に<「げに」は語り手が納得したニュアンス。『完訳』は「以下、源氏は反転して、自らを凝視し、姫君への恋慕に自制的」。また「人の御ありさま」について『完訳』は「源氏の人柄。一説には「あらまほしく」まで姫君とする」と注す。>とある。一説に従う。\*「あだけ」は<果敢ない移り気、浮気>。\*「もどき」は<真似事>で、其処に悪意が加われれば<揶揄>。

「むなしからむは(空しく終わってしまったては)、いよいよ人笑へなるべし。いかにせむ」と、御心動きて(御心が落ち着かず)、二条院に夜離れ重ねたまふを(二条院にお帰りにならない夜を重ねなされたので)、女君は(夫人は)、\*たはぶれにくくのみ思す(戯れでは済まないほど恋しく御思いになります)。\*注に<「ありぬやとところみがてらあひ見ねば戯れにくきまでぞ恋しき」(古今集俳諧歌、一〇二五、読人しらず)。>とある。早速にWebサイト「古今和歌集の部屋」を頼ると、「人の身も ならばしものを あはずして いざこころみむ 恋ひや死ぬると」(518、題しらず、読人知らず)に対応してみると面白いと解説されていて、面白かった。「ありぬやと」は<在ってしまうかと→在り得るかと→(会い見ないでも)平気だろうかと→それほどでもない相手だろうと>いうところか。試しに会わないで見る、という微妙な距離感には今も昔も変わらない説得力がありそうだ。

忍びたまへど(堪えていらしても)、いかがうちこぼるる折もなからむ(どうして涙する時が無いで居られましょうか)。

「あやしく例ならぬ御けしきこそ(どうして何時に無く涙ぐんで御出でなのか)、心得がたけれ(分かりませんね)」とて(と言って)、御髪をかきやりつつ(光君が夫人の髪を撫でながら)、いとほしと思したるさまも(愛しく御思いになる姿も)、絵に描かまほしき御あはひなり(絵に描きたいほどの睦まじさです)。

「宮亡せたまひて後(御母宮がお亡くなりになった後)、主上のいとさうざうしげにのみ世を思したるも(主様がとても心さびしくのみ世を御思いになるのも)、心苦しう見たてまつり(御いたわしく拝見いたし)、太政大臣(おほきおとど)もものしたまはで(もお置きに為っていらっしやらないので)、見譲る人なき(他に政務を任せる者も無い)ことしげさになむ(忙しさです)。

このほどの絶え間などを(このところ帰宅できないのを)、見ならはぬことに思すらむも(今までに無かったことと御思いになるのも)、ことわりに、あはれなれど(尤もな事で気も立つでしょうが)、今はさりとも(今は仕方の無いことと)、心のどかに思せ(穏やかに御考えなさい)。おとなびたまひためれど(ずいぶん大人びて来て御出でのようだが)、まだいと思ひやりもなく(まだどこか世間知らずで)、人の心も見知らぬさまにものしたまふこそ(私の気持ちもお分かりで無いようにいらっしゃるところが)、らうたけれ(可愛らしい)」

など(などと言って光君は)、\*まろがれたる御額髪(うつぶして丸く固まった夫人の額髪を)、ひきつくろひたまへど(繕いなさるが)、いよいよ背きてものも聞こえたまはず(夫人はますます横を向いて何も申しなさいません)。 \*「まろがる」は<丸く固まる>。

「いといたく若びたまへるは(そんなに子供っぽく為さるのは)、誰がならはしきこえたるぞ(誰がお教え申したことか)」とて(と夫人をたしなめては)、「常なき世に(短い人生で)、かくまで心置かるも(愛する人からこうまで気持ちを隔て置かれるのも)あぢきなのおざや(味気ない成り行きだ)」と、かつは\*うち眺めたまふ(と、反面で光君は反省なさいます)。 \*「うちながむ」の「うち」は、「打ち放す」という語感なら<物思いに耽って、ぼんやりと遠くを見遣る>ことかと思うが、此処は閨の場面なので「内向きに」という語感だろうから<反省する>。

「齋院にはかなしごと聞こゆるや(齋院に慰め言葉をお手紙申した事を)、もし思しひがむる方ある(もしや誤解なさっては居ませんか)。それは、いともて離れたることぞよ(それは大変に見当違いのことですよ)。おのづから見たまひてむ(自然にお分かりに為る筈ですが)。

昔よりこよなうけどほき御心ばへなるを(昔から前齋院が例えようも無く気遠い他人行儀な御心向きののを)、\*さうざうしき折々(私はどうにも気に入らない時があつて)、ただならで聞こえ悩ますに(強く反論申しますと)、かしこもつれづれにものしたまふ所なれば(あちらもひとつひとつにお考えなさる理屈が有るようで)、たまさかの応へなどしたまへど(まれには御返事などを為さいますが)、まめまめしきさまにもあらぬを(本気の遣り取りでは有りませんから)、かくなむあるとしも(その内容が逐一如何だとかは)、愁へきこゆべきことにやは(貴方に御相談申すべき事などでは、有る筈も在りません)。うしろめたうはあらじとを(御心配には及びませんので)、思ひ直したまへ(機嫌を直して下さい) \*この「さうざうしき折々」を<心寂しい時に>と解する向きが多いようだが、意味不明だ。此処の構文は「御心ばへなるを(御意向なのを)」「聞こえ悩ますに(反論申すと)」であつて、「さうざうしき折々」は条件付けであり、「気遠き」「ただならで」は形容修辞だ。また、「ただならで聞こえ」は<直答で無く申す=人伝で話す>の洒落かもしれない。つまり光君は夫人に、あたかも朝顔君と反目しているかの子供騙しの言い訳をしている、のだが、全くの嘘を並び立てているのでもなく、直答を拒んだ朝顔君への恨みの部分だけを全体のように言い繕うという小賢しさである。と言っても、その小賢しさは読者向けの光君の人物描写で、紫君にとつては何れ子供騙し以外の何物でもないのだろう。

など、日一日慰めきこえたまふ(光君は一日中夫人を慰め申しなさいます)。

[第二段 夜の庭の雪まろばし]

雪のいたう降り積もりたる上に、今も散りつつ、松と竹とのけぢめ(松の太い幹にどっしり積もると竹のしなやかな笹にうっすらと積もる違いが)をかしう見ゆる夕暮に(面白い庭の風景に見える夕暮れに)、人の御容貌も光まさりて見ゆ(光君の御姿もいっそう光り輝いているように思われます)。

「時々につけても(季節の折々につけても)、人の心に移すめる(多くの人々が心惹かれるような)花紅葉の盛りよりも(春の花や秋の紅葉の盛りよりも)、冬の夜の澄める月に、雪の光りあひたる空こそ、あやしう(幽玄で)、色なきものの(華やいではないが)、身にしみて(深く感じ入られ)、この世のほかのことまで思ひ流され(現世を離れたことまで思いが及んで)、おもしろさもあはれさも(嬉しさや悲しさに)、残らぬ折なれ(捉われない風情です)。すさまじきためしに(荒むばかりの例として冬の情緒を)言ひ置きけむ人の心浅さよ(言い定めた人の思慮の浅いことよ)」

とて、御簾巻き上げさせたまふ。

月は隈なくさし出でて(月が明るく照らし出して)、ひとつ色に見え渡されたるに(一面に青白く見え渡される庭に)、しをれたる前栽の蔭心苦しう(しおれた植え込みの草木の形も哀れで)、遣水もいといたうむせびて(流水もごく細く枯れ掛かり)、池の氷もえもいはずすごきに(池の氷も何とも言えず荒涼とした中に)、童女下ろして(童女を行かせて)、雪まろばしせさせたまふ(雪転がしをさせなさいませ)。

をかしげなる姿(子供たちの可愛らしい姿や)、頭つきども(髪型が)、月に映えて、大きやかに馴れたるが(少し年長の慣れた子たちが)、さまざまの(それぞれの)相(あこめ、お端折り着を)乱れ着(簡素に着付けて)、帯しどけなき宿直姿(袴の帯も緩めた寝巻き姿で)、\*なまめいたるに(飾らない瑞々しさで)、こやなうあまれる髪(伸ばし出してだいぶ長く垂れた黒い髪の端が)、白きには(雪の白さには)ましてもてはやしたる(いっそう引き立っていて)、いとけざやかなり(とても鮮やかです)。\*「なまめく」は<優美に、色っぽい>の意味で使われる事が多いようだが、広くは「生々しい」のだから<瑞々しい>や<若々しい>とも言えそうで、この場では<飾り気が無い>ような気がする。いや、別に色気を感じてもいいのだろうが、この場面の描写は冬の厳しさに衰えてゆく命を語りながら、同じ場面も見方を変えれば別の命の芽吹きが見える、といった無常観を表現しているように思えるので、客観的な語りの方が説得力が有りそうな気がした。

小さきは(小さい子供たちは)、童げてよろこび走るに(無邪気に喜んで走り回っては)、扇なども落して、うちとけ顔をかしげなり(夢中になっているのが可愛い)。いと多うまろばさらむと(子供たちはもっと大きく転がそうと)、\*ふくつけがれど(欲張るが)、えも押し動かさで\*わぶめり(もう押し動かさないほど大きくなって困っているようです)。かたへは(他の子供たちは)、東のつまなどに出でみて(西の対の東側の妻戸先の縁側に出て座し)、心もとなげに笑ふ(自分たちもやりたそうに外の子供たちを見て笑う)。\*「ふくつけがる」は<欲張る>と古語辞典にある。\*「侘ぶ」は<嘆く、困る>。

[第三段 源氏、往古の女性を語る]

「一年(ひととせ、ある年に)、中宮の御前に雪の山作られたりし(中宮が御庭に雪の山をお作りになって)、世に古りたることなれど(世間で昔から行われていることに過ぎないが)、なほめづらしくもはかなきことをしなしたまへりしかな(宮にしては珍しく興に乗って他愛無い事を為さっていらしたものだ)。何の折々につけても(何かの折につけても)、口惜しう飽かずもあるかな(中宮が偲ばれてその死が悼まれるところです)。

いとけどほくもてなしたまひて(大変に礼節を重んじなされたので)、くはしき御ありさまを見ならしたてまつりしことはなかりしかど(詳しいご様子を日頃から親しくは拝し申し上げる事は無いものの)、御交じらひのほどに(御相談の相手としては私を)、うしろやすきものには思したりきかし(宮は信頼して下さっていらしたようです)。

うち頼みきこえて(私も宮をご信頼申し上げて)、とあることかかる折につけて(何かの折につけて)、何ごとも聞こえかよひしに(何事かを御相談申し上げた時に)、もて出でてらうらうじきことも見えたまはざりしかど(勿体付けた賢者ぶりは御見せに為らなかつたが)、いふかひあり(何か役に立つ)、思ふさまに(望ましい)、はかなきことわざをもしなしたまひしはや(ちょっとした助言などをして頂けたものでした)。世にまた(この世に二人と)、さばかりのたぐひありなむや(あれほどの方がいらっしゃるか)。

やはらかに\*おびれたるものから(柔和でのんびり為さっていらっしゃりながら)、深うよしづきたるところの(深い教養を備えて御出でで)、並びなくものしたまひしを(並ぶ者が無い中宮でいらしたけれども)、君こそは(貴方こそは)、さいへど(そうは言っても)、\*紫のゆゑ(中宮の姪になる血縁を)、こよなからずものしたまふめれど(とても強く結んで御出でなのに)、すこしわづらはしき気添ひて(少し気忙しくて)、かどかどしさのすすみたまへるや(細かな事を気にし過ぎ為さるところが)、苦しからむ(困りものです)。 \*「おびる」は<おっとりしている、ぼんやりしている>と古語辞典にある。 \*「紫のゆゑ」は<中宮の血縁>を意味する。が、「紫」の語意に「中宮」が有る訳ではない。正確ではないが、大雑把に言って「紫」は王家の色と考えられる。その線で言えば、「紫の縁」は<王家の血筋>だ。でも、それなら朝顔君や常陸宮君でさえ「紫の縁」になってしまう。だから、この物語で「紫」と言えば、光君が正しく<王族たるに相応しい高貴な人>と認めた人物という意味で使用される語となって、それが「藤壺中宮」ということになる。そして、この源氏物語で言う所の主観的な<大切な人の縁者>なる意味での「紫のゆかり」の語用が、客観的な<王家一族>の意味とは別に、後に一般化されて今に至るという事態に成ったらしい。また、注には<「紫のひととゆゑに武蔵野の草は見ながらあはれとぞ見る」(古今集雑上、八六七、読人しらず)>が参照歌として示されている。紫草はかつて武蔵野に群生していたとのことで、この歌の情景は「紫の一原所以に武蔵野の草は皆がら憐れとぞ見る(辺り一面に群がって咲く武蔵野の紫草は全体が見事な光景だ)」となり、その洒落言葉に重ねた歌意は「紫の一本故に武蔵野の草は見ながら哀れとぞ見る(紫草に縁があると思えば他の武蔵野の草を見ても気持ちが揺れる)」となって、この物語での「紫のゆかり」を優雅に説明する。注は更に<「知らねども武蔵野といへばかたれぬよしやさこそは紫のゆゑ」(古今六帖、五)>も参照歌に示すが、此方の歌に付いては「若紫」巻の、まだ幼かった紫君に光君が手習いを教える場面で、正にその場면을説明する歌として既に見た。確かに「紫」は禁色で高貴さを表すだろうし、その光学的な波長の短さに不安定感を喚起され、青と赤の配合による色合いは華やかだが開放感の無い閉鎖的な荘厳さで、その色に病氣平癒の呪術性を求めることもあり、生薬として殺菌作用があるとされる「紫根」は珍重されるようだ。ただ、いずれにしても「紫のゆゑ」という言葉自体に特別な意味合いが有るのではなく、

光君の思いという形で作者がこの言葉に独特な意味合いを持たせている、と考えるべきだろう。

前齋院の御心ばへは(同じように礼節を尊びなざる王家筋とはいえ前齋院の御性格は)、またさまことにぞ見ゆる(また違ったものと思われます)。さうざうしきに(御様子が気になって)、何とはなくとも聞こえあはせ(何とは無しにお便りし合うという)、われも心づかひせらるべきあたり(私が今もお暮らしぶりを気遣わずには居られない方は)、ただこの一所や(もう此方だけが)、世に残りたまへらむ(世に残って御出ででしょうか)」

とのたまふ(と光君は仰います)。

「尚侍(ないしのかみ、筆頭女官であった右大臣家の六姫)こそは、らうらうじくゆゑゆゑしき方は(物知りで家柄の良さに於いては)、人にまさりたまへれ(抜きん出ていらしたでしように)。浅はかなる筋など(帝以外の殿御を引き入れなざるなどという軽率な事柄とは)、もて離れたまへりける人の御心を(懸け離れていらしたはずのあの方の御分別にしては)、あやしくもありけることどもかな(殿に謀反の疑いがかかる事態を引き起こしなされたと言うのは不思議でならない事々だったものです)」

とのたまへば(と紫君が仰れば)、

「さかし(確かに)。なまめかしう容貌よき女の例には(優雅で美しい女の典型としては)、なほ引き出でつべき人ぞかし(やはり引き出すべき人でしょう)。さも思ふに(そう考えると)、いとほしく悔しきことの多かるかな(心ならず悔やまれることの何と多いことか)。まいて、うちあだけ好きたる人の(まして場当たりで女遊びに興じる人は)、年積もりゆくままに(歳を取るにつれて)、いかに悔しきこと多からむ(抛り所の無い人生を悔やむ事がどんなに多いことだろう)。人よりはことなき静けさ(そういう人よりは私はまだ落ち着いた人生だ)、と思ひしだに(とは思っていますねえ)」

など(などと光君は)、のたまひ出でて(仰り出して)、尚侍の君(かんのきみ)の御ことににも(との顛末に付いても)、涙すこしは落したまひつ(涙を少し零しなさいました)。

「この(また、此処では)、数にもあらずおとしめたまふ(話題にすることも無いと貴方がお考えの)山里の人こそは(山荘の人は)、身のほどにはややうち過ぎ(身分よりはやや出過ぎて)、ものの心など得つべけれど(教養を備えているようですが)、人よりことなべきものなれば(若君の実母という特別な立場なので)、思ひ上がれるさまをも(気負って屋敷を構えているのも)、見消ちてはべるかな(目を瞑っているのです)。いふかひなき際の人はまだ見ず(言うに値しないこうした低い身分の者は良く知らないが、)。人は(この明石君が)、すぐれたるは(優れた素養で居るのは)、かたき世なりや(珍しいことなのでしょう)。

\*東の院にながむる人の心ばへこそ(東院に長く住む花散里の行儀作法こそは)、古りがたくらうたけれ(昔に変わらず慎みがあります)。さはた(それにまた)、さらにえあらぬものを(普通は無関係だが)、さる方につけての心ばせ(姉である故院の女御の生活についての気遣いを)、人

にとりつつ(その妹君にも向ける事で)見そめしより(その人を見知って以来)、同じやうに世をつつましげに思ひて過ぎぬるよ(女御へのお世話と同じ様に妹君との仲も遠慮がちに考えて来たのですよ)。今はた(今さらはこの立場のまま)、かたみに背くべくもあらず(互いの気持ちを疑うことも無く)、深うあはれと思ひはべる(深く愛しいと思っています) \*「東の院にながむる人」は注にく花散里をいう。>とある。が、「ながむ」を<思い悩む>とは取り難いので<長く住む>と取ってみたが、この語用は意味不明だ。その所為か、此処の文は全体に意味が取り難い。こんな風にも読めるか、という程度。

など、昔今の\*御物語に夜更けゆく(昔や今の御話しをする内に夜は更けます)。 \*「おんものがたり」と言っても、光君の思い出話はこの雪の前庭に相応しい情緒話であり、当然の事ながら行状の自白ではないのだから、初めから体裁を取り繕ったものになる。すると空かさず紫君は非難めいた恨みがましい応対をして見せたが、光君はそれも論点をすり替えて受け流しては、恩着せ気味に別の話へ続けて、いくらかは言い訳がましく、かつは説教臭い話しっぷりにも成っていて、まあそういう全体がこの雪の日の二条院の雰囲気だと、描写されているのだろう。

#### [第四段 藤壺、源氏の夢枕に立つ]

月いよいよ澄みて、静かにおもしろし。女君、

「氷閉ぢ石間の水は行きなやみ、空澄む月の影ぞ流るる」(和歌 20-10)

「氷で閉じた水たまり、流れ行くのは月ばかり」(意識 20-10)

\*注にく紫の上の独詠歌。『集成』は「氷が張って石の間を流れる遣水は流れかねていますが、空に澄む月の光はどこおることなく西に向ってゆきます。「ながるる」は、氷の面に映じながら移る景をいう。庭を眺めての叙景の歌である」。『完訳』は「「行き」「生き」、「澄む」「住む」、「流るる」「泣かるる」、「空」「嘘言」の掛詞。自身を石間の水に、源氏を月影にたとえ、孤心を形象」「氷の張った石間の水は流れかねているけれども、空に澄む月影は西へと傾いてゆきます—私は閉じこめられて、どう生きていけばよいのか悩んでおりますので、嘘ばかりおっしゃって私を離れていこうとするあなたのお顔を見ると泣けてきます」。『新大系』は「冬夜の庭と月光に触発された歌。先刻までの朝顔姫君への嫉妬も、自然観照のうちに封じこめられる。石間の水に自身を、月光に源氏を喩えたとする読み方もあるが、とらない」と注す。>とある。この歌は語句も文型も今に通じる言い回しで、そのまま詠まれた情景は理解できるほどなのに、意外なほどの長文の注釈だ。その煽りでこのノートも長文になるが、別に枚数制限などは無い勝手なノートなので、ダラダラと続ける。まずは『集成』の注釈だが、是は情景読みのままで言い直したもので、確かに分かり易いが、その分かり易さは歌自体の出来映えによるもので、注釈としては不十分ではある。次に『完訳』の注だが、是は分かり易い上に丁寧な注かと思う。ところが最後の『新大系』の注は、紫君の心情を「先刻までの朝顔姫君への嫉妬も、自然観照のうちに封じこめられる」と説明しながら、「石間の水に自身を、月光に源氏を喩えたとする読み方もあるが、とらない」という意味不明の文である。およそ、心情を「自然観照のうちに封じこめ」ることを「喩える」と日本語では表現する。また、心情を様々な事象に託す言い回しを「洒落言葉」と言うのであり、その言い回しの妙がえも言われぬ味わいを言語共有者に与え、その集団に歌として認識されるのだろう。だから、その言い回しに何かを共感した聞き手がさまざまな解釈を試みるのは、古文でなくても自分の感性の確認作業としても、当然に行うものだ。まして古文であれば、解釈の手掛かりを得るべく語句や文型に付いての一定の「分析」も必須となる。その際の読み取り間違いの指摘は有り得るが、「喩えたとする読み

方」自体を否定しては和歌を、というか歌というものを味わうことは出来ない。このような支離滅裂な言論を一見成立していそうだからと取り上げる渋谷教授の意図も分からない。学生向けのトリッキーな注釈掲載かもしれないが、評価しかねる。というわけでこの歌に於いては、情景読みの言い換えは必要ないし、歌意もその情景読みで相当程度は感じ取れる気もするが、『完訳』の分析に敬意を表して今一度見直す。と、「私は(あなたの氷のような冷たい心に)閉じこめられて、どう生きていけばよいのか悩んでおりますので、嘘ばかりおっしゃって私を離れていこうとするあなたのお顔を見ると泣けてきます」とは、如何にも「月いよいよ澄みて、静かに面白く痛烈だ。

外を見出だして(庭を見ようとして)、すこし傾きたまへるほど(少し顔を傾けなされたところが)、似るものなくうつくしげなり(例えようも無く美しく見えました)。髪ざし(髪質や)、面様のおもやう、顔立ちが)、恋ひきこゆる人の面影にふとおぼえて(恋慕い申し上げている人の面影にふと思えて)、めでたければ(目を惹かれたので)、いささか分くる御心も(少しばかり他へ分けていた光君の御愛情も)とり重ねつべし(取り返し改めて厚く向けられるようです)。

鴛鴦(をし、オシドリ)のうち鳴きたるに(が鳴くのをお聞きになって、光君はお読みになりました)、

「かきつめて昔恋しき雪もよに、あはれを添ふる鴛鴦の浮寝か」(和歌 20-11)

「昔恋しいこの雪景色、池のオシドリ誰が知ろ」(意識 20-11)

\*注に<源氏の独詠歌。『集成』は「あれもこれも昔のことが恋しく思われる雪の降る中に、哀れをそそる鴛鴦の浮き寝であることよ。「かきつめて」は、かき集めて。「昔」は、藤壺のこと。「鴛鴦の浮寝」は、紫の上との間柄を意味しよう。『完訳』は「むかし恋しき」は藤壺追懐の情。「雪もよに」は「雪もよよに」の約か。「鴛鴦のうきね」は、藤壺を亡くした悲情を象徴。前述の、雪の夜にかたどられた心象風景に連なり、亡き藤壺への哀傷を詠む。同じく雪の夜を詠みながらも、紫の上の孤心と、源氏の哀傷という相違に注意」と注す。>とある。オシドリは「おしどり夫婦」の語があるほど<仲の良いツガイ>の印象が強い鳥だ。ただ、生態観察上は一生同じツガイではなく、子育ては他のカモと同じくメスが先行、繁殖期以外はオスとメスは別行動で、かつ群れで暮らし、繁殖期ごとに相手を選び替える、というごく普通の水鳥らしい。ということは、ツガイの印象が強いのは専ら、オスの特徴的な色分けのある羽色とメスの黒っぽい地味な羽色との対比で繁殖期にツガイで泳ぐ姿が目につく、という事に拠るものようだ。「かきつめて」は<童女の雪まろばし>から藤壺中宮が昔作った<雪の山>への追憶。その中宮を思わせる紫君との今宵の共寝に、光君は酔い痴れる。「雪もよに」の解釈は定説が無いらしい。情景としては<雪模様に>と読みたい所で、昔を思い出す雪景色の庭で「あはれを添ふる鴛鴦」が池に泳いでいるのは、如何にも絵に成る。と同時に、「雪も夜に」「あはれを添ふる鴛鴦」と読めば、ツガイのオシドリに焦点が当たって、背景に雪が降る絵に成って来る。それを更に「雪も世に」と読めば、ツガイのオシドリに自分たちを準えて、中宮似の紫君を改めて見直しては感慨に耽る、という光君の歌意が見える。

入りたまひても(寝所にお入りになっても)、宮の御ことを思ひつつ大殿籠もれるに(光君は中宮の事を考えながら御休みになっただが)、夢ともなくほのかに見たてまつる(夢とも無く仄かにその御姿を拝し申し上げると)、いみじく恨みたまへる御けしきにて(深く恨みなされた御表情で)、

「漏らさじとのたまひしかど(秘密を漏らさないと仰ったくせに)、憂き名の隠れなかりければ(浮名を隠せなくなってしまう)、恥づかしう(恥ずかしく)、苦しき目を見るにつけても(辛い目に遭うにつけても)、つらくなむ(情けないものです)」

とのたまふ(と仰せになります)。御応へ聞こゆと思すに(光君が御応え申そうと御思いになった時に)、襲はるる心地して(もののけに襲われたようになって)、女君の(夫人が)、

「こは(まあ)、など(どうして)、かくは(このようにうなされて)」

とのたまふに(と仰る声に)、おどろきて(光君は目が覚めて)、いみじく口惜しく(消えてしまった中宮がとても心残り)、胸のおきどころなく騒げば(収まる事も無い動揺を)、抑へて(抑える内に)、涙も流れ出でにけり(涙も流れ出ていました)。今も、いみじく濡らし添へたまふ(未だに止め処なく泣き続けていらっしゃいます)。

女君、いかなることにかと思すに(夫人はどうしたことかと御思いになるが)、\*うちもみじろかで臥したまへり(光君は少しも動かずに横になっていらっしゃいました)。\*注に<『集成』は「源氏は身動きもしないで横になっておいでになる。主語を紫の上とするのは誤り」。『完訳』は「紫の上は闇のなかの不思議を探るべく身を固くする」と注する。>とある。次に光君の独詠歌があることと、文自体の意味合いからして光君が主語だろう。心配して、恐らくは身を起こして声を掛けた夫人が、身じろがない、では奇怪しい。

「とけて寝ぬ寝覚めさびしき冬の夜に、むすぼほれつる夢の短さ」(和歌 20-12)

「忘れられずに夢に見て、逢えた途端に覚めた人」(意識 20-12)

\*注に<源氏の心中独詠歌。「とけて寝ぬ」の「ぬ」打消の助動詞。夢の中での藤壺との短い逢瀬を惜しむ気持ち。>とある。「とけて寝ぬ」の「解く」は「結ぼほる(結ばれる)」の対語で、この歌の底意であろう縁にまつわる言い回しなので、意味は<わだかまりが解けて→安心して>と言うよりは<縁を切る→忘れる>となる。また、「寝ぬ」は「いぬ(寝る)」では無く「ねぬ(寝ない)」だから、心中独詠歌なら「とけて寝ぬ」を<安心して眠れない>などと表意を取り繕う必要も無いので、本意の<中宮を忘れてなど寝付けない>と読んで良さそうだ。だから、<懐かしい中宮を忘れずに寝付いたのに寝覚めて見ればやはり故人だと思知らされる寂しいこの冬の夜にせめても夢で逢えていた時の何と短かったことか>という率直な印象を音韻に刻んだ、という歌なのだろう。

[第五段 源氏、藤壺を供養す]

なかなか飽かず(光君はとても落ち着く事が出来ず)、悲しと思すに(悲しく御思いになって)、とく起きたまひて(早くお起きになると)、さとはなくて(それとはなしに)、所々に(見知った各寺に)御誦経などせさせたまふ(先人供養の読経を上げさせなさいます)。

「苦しき目見せたまふと(中宮が辛い目にお遭いになっていると)、恨みたまへるも(私を恨みなさるのも)、さぞ思さるらむかし(きっと帝がお知りになった事を辛いと思っておいでなのだろう)。行なひをしたまひ(ご自身は勤行に励まれ)、よろづに罪軽げなりし御ありさまながら(さま



ざまな功德を為さったお暮らしぶりながら)、この一つことにてぞ(ただ私との過ち一つがあったために)、この世の濁りをすすいたまはざらむ(現世の穢れを濯ぎ切れ成されなかった)」

と、ものの心を深く思したどるに(ものの道理を深く思い当たりなされば)、いみじく悲しければ(悔やむにも悲しくて)、

「何わざをして(何としてでも)、知る人なき世界におはすらむを(他に誰も事情を知らないあの世にいらっしゃる中宮を)、訪らひきこえに参うでて(お見舞いに伺い申して)、罪にも代はりきこえばや(罪を代わって背負い申したい)」など、つくづくと思す(などと、つくづく御思いになります)。

「かの御ために(中宮の御為に)、とり立てて何わざをもしたまふむは(特別な法要を上げ申すのは)、人とがめきこえつべし(世間が不審に思うだろう)。内裏にも(帝に於かれても)、御心の鬼に思すところやあらむ(自責の念を御覚えに成るかもしれない)」

と、思しつつむほどに(法要は遠慮なさって)、阿弥陀仏を心にかけて念じたてまつりたまふ(阿弥陀仏に救済のご利益を内心に願って自分だけで念仏読経を唱えなさいました)。

「\*同じ蓮に(一蓮托生を)」とこそは(と願ってか)、 \*注にく『集成』は「極楽の同じ蓮の上に往生しよう。歌の「なき人をしたふ」に続く。極楽の往生人は、蓮華の上に半座をあけて同行の人を待つとされる。『完訳』は「浄土では夫婦が後から来る伴侶のために蓮華の座をあけて待つ。しかし夫婦ならざる源氏は、一蓮托生を望みえず、絶望の歌を託す」と注す。>とある。

「亡き人を慕ふ心にまかせても、影見ぬ三つの瀬にや惑はむ」(和歌 20-13)

「会いたさだけで訪ねても、賽の河原に迷うのか」(意識 20-13)

\*注にく源氏の独詠歌。「亡き人」「影」は藤壺をさす。「水の瀬」「三つの瀬」の掛詞。『新大系』は「女は最初に契った男に負われて三途の川を渡るとされる。冥界でも面会ができぬとする源氏の絶望を詠んだ歌」と注す。>とある。歌意は、訳文にある<亡くなった方を恋慕う心にまかせてお尋ねしても、その姿も見えない三途の川のほとりで迷うことであろうか>の他には見当たらず、然程の絶望感とも思えない。また、恋情や仏心、宿命観や罪悪感なども見出せず、私には何もピンと来ない歌だ。

と思すぞ(とお詠みなさったのも)、憂かりけるとや(辛い気持ちの表れだったのでしょうか)。

(2010年7月28日、読了)